

『上山名産名所番付』再考

— 見立て番付の性格 —

Reconsidering “Kaminoyama Meisanmeisyo banzuke”

— The nature of the historical document known as the Mitate Banzuke —

大城里佳子 OKI Rikako

要 旨

山形県上市市には、当地の名産をまとめた資料『上山名産名所番付』がある(以下『上山名産』と表記する)。本資料は古名所とともに、現在は姿を消した上山の古産物を私たちに教えてくれるほか、名産の変遷を示す、興味深い「天保期の資料」として度々注目されてきた。しかし、番付左側に記された脇書き、そして番付作成の経緯を追うと、「天保期の資料」としての位置づけに疑問が生じた。

本研究は、文献調査と聞き書き調査を通じて先行研究を再検討し、歴史資料としての『上山名産』を再考するものである。

キーワード：上山名産名所番付 見立て番付 名産

1. はじめに

山形県上市市は、山形県の南東部に位置する地域である。蔵王連峰の裾野に広がる地域で、盆地に市街地が形成されており、県内でも比較的穏やかな気候を活かした果樹栽培などが行われている。

特に、令和5(2023)年の時点でラ・フランス、サクランボ、ブドウ、ベニガキ、コンニャク、ワインは市の特産としてP

Rされており、お土産やイベントなどにより取り上げられている。

これらは今でこそ上市市の名産として観光雑誌や市の公式サイト、メディアなどで紹介されているが、昔からこれら



図1 山形県上市市の位置(国土地理院地に加筆)



【番付1】上山名産名所番付(上山郷土資料館より提供)

が名産だったかという点、実はそうではない。

上山市には、当地の名産をまとめた資料『上山名産名所番付』がある。(なお、同文の書籍があるため以下『上山名産』と表記する。)

ここには名所53項目のほか名産54項目が記載されているが、その内容からは、令和5(2023)年時点とは名産がほとんど異なっていたことがわかる。『上山名産』は、古名所とともに現在は姿を消した上山の古産物を私たちに教えてくれるほか、名産の変遷を示す資料なのである。

その点で、上山の歴史に関する興味深い資料として度々注目されてきた。例えば、昭和56(1981)年、昭和57(1982)年の山形新聞のコラム欄で取り上げられ「上山藩政時代の製作」、「天保年間にできたらしい」と、天保期の資料として紹介されている。しかし、本資料の左側にある脇書きに注目すると、「天保年度の調 昭和15年正月宮生村下方寶藏物ヨリ写 石黒弥兵エ 中島長右エ門」とあり、当番付の作成自体は石黒弥兵エ、中島長右エ門により昭和期に行われたと読み取れる。また作成の経緯について、既に上山郷土史研究会『上山名産名所番付』、『上山市史 別巻下 民俗資料編』の古説産物考で指摘があるが、双方で異なる見解が述べられている。上山郷土史研究会『上山名産名所番付』では、

(前略)
同郷宮生村下方から写したもので、当時神官をしていた石黒弥兵エ氏と中島長右衛門氏が天保年間のものを調べたもので、中生居五十三、奈良崎安次郎氏が弥兵エ氏に遊びに来てよくこの話をしておったという。上山の名産はどこにどんなものがあったか、名所は何処でどんなものがあったか、二人は調べてこの番付を作ったものである。

(後略)

としており、昭和15年に石黒氏と中島氏が天保年間の名産・名所を調べて作成した、と解釈できる。

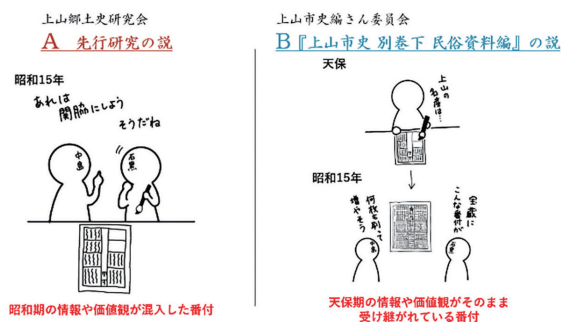


図2 上山名産名所番付作成の経緯・2つの説

一方で、『上山市史 別巻下 民俗資料編』では(前略)

祭具などを蔵する宝蔵が村の上方と下方にあったらしく、その下方宝蔵に天保年間に作成した番付の原本か、版本かがあったのであろう。昭和十五年に石黒・中島両氏が、上山の古産物・古名所を知るよすがとして、複刷したものと思われる。

(後略)

と述べており、天保年間に作成された番付の原本を石黒氏と中島氏が見つけ、昭和15年に複刷した、と解釈できる。

前者の解釈では、石黒氏と中島氏、つまり昭和期の情報や価値観の混入が推測され、後者の解釈ではもとの番付の作成者、つまり天保期の情報や価値観がそのまま受け継がれていることになる。

このように、『上山名産』は作成時期について意見の相違があるため、資料としての正確性に疑問符がつく。本研究は以上の点を鑑み、先行研究の再検討および諸調査を通じ、歴史資料としての『上山名産』を再考するものである。

2. 名産番付

18世紀前半、徳川吉宗により行われた享保の改革の一環で、それぞれの土地に適した特産物を作ることが奨励された結果、各地域ではその土地の文化性や地域性を象徴する特産が出来上がり、やがて名産となっていった(曲田2003)。つまり名産はその土地の特徴を表すといえる。そして、人々が各地域の名産を知る手段として活躍した情報手段のひとつが「番付」だった。『上山名産』は見立番付という類に属するが、これは相撲や芝居、祭礼の番付に倣って、様々な事柄をテーマに番付化したものである。

見立番付は、そのほとんどが作成者の名前がないか、偽名である。それに加え、製作過程が明確ではないという点があ

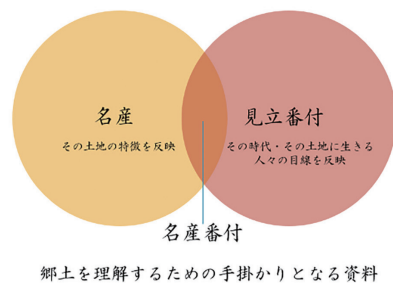


図3 名産番付の特徴

るため、資料としての信用性に疑問が生じ、研究の対象とされることが少ない(青木 2014)。しかし、見立番付は時代性・地域性・文化性が反映された、近世を紐解く重要な資料であることが、林・青木らによって指摘されている(林・青木 2003)。

先述した通り、見立番付は相撲番付や芝居番付、祭礼番付に見立てたもので、テーマによってそれぞれの構成が使い分けられていたが、特に好まれたのは相撲番付の形式だった。相撲番付には主に力士の出身や立場などが記載されているが、文字の大きさ、位置によってその力関係が一目で理解できる、簡潔で合理的な構成が特徴である。そのため、この形式は情報が溢れる近世社会に適し、好まれていた(青木 2003)、(石川 2001)。そして名物・名産の番付が作られる背景として、石川は「産業の発達による消費生活の変化」、「さまざまな人々が、それぞれの立場で産業を考える時代がやってきた」ことを挙げ、見立番付を「手軽さの中に潜む真実」として見ている(石川 2001)。「さまざまな人の、それぞれの立場で考えた本音」という視点で見立番付を見ると、歴史資料としての価値や可能性に気が付く。必ず作成者の価値判断により成り立つ見立番付は、その時代・その土地に生きる人々の目線であるといえる。土地の特徴を表す名産と、人々の目線を反映する見立番付。この2つの特徴を併せ持つのが名産番付である。

天保期に作成されたのか、昭和期に作成されたのか。作られた年代によって、見立番付、ひいては『上山名産』のもつ性格や、それに伴った資料の活用方法は大きく変化する。見立番付を歴史資料として見るうえで、作成された年代という要素は特に重要視すべき点なのである。

3. 文献調査

3-1 上山郷土史研究会『上山名産名所番付』

文献調査では各研究・史料の分析を行い、『上山名産』を天保の資料として位置づけるに値するかを検討した。

まず初めに、先行研究の分析を行った。『上山名産』の先行研究としては、上山郷土史研究会『上山名産名所番付』(上山郷土史研究会 2001)が唯一のものである。この研究では、古老への聞き書き調査と『上山見聞随筆』、『上山市史』などを用いた文献調査により、名産・名所それぞれ54項目・53項目の詳細がまとめられている(なお、名産のうち4項目は詳細不明とし、詳しい説明はなされていない)。これを各名産の

生産時期や時系列に注目し、分析した。

その結果、全体の特徴として各名産が生産されていた期間が不明瞭であることが分かった。この番付は天保年度の調べとされているが、かろうじて天保期に生産があったと考えられるのは「川口 絹糸」のみだった。そもそも大半は年代の記述自体が無いのである。

なかでも「長清水 瓜西瓜」に至っては、「栽培が始まったのは明治4年以降」と明記されており、明らかに天保以後に生産が開始されたことが確認できる。

また、「手職の将棋の駒」にも注目したい。上山における将棋の駒の生産が始まったのは、天童藩の藩士・吉田大八が下級武士の手内職にと奨励した、将棋の駒作りを真似たためだと古老により語られている。しかし吉田大八の経歴を辿ると、天保3(1832)年生まれの吉田が父の家督を継ぎ藩士となるのも、武士の手内職として将棋の駒作りを奨励したのも、天保期を過ぎてからの出来事である。

さらに、「須田坂熊野山の松」も、「右側の松は昭和19年の冬、軍部より舟材として供出」、「左側は昭和29年に須田坂の消防自動車のポンプを購入する際、購入代金の一部に充当」とあり、松が活用されたのは明らかに昭和期である。このように、『上山名産』の情報を精査していくと、時系列が天保期のこととはいえない箇所があるのだ。

3-2 『上山市史』

続いて、『上山市史 別巻下 民俗資料編』の古産物考に触れる。当書では主に『上山見聞随筆』から引用しながら、一部の名産を取り上げて紹介している。番付作成の経緯については先述の通りで、上山郷土史研究会『上山名産名所番付』同様、『上山名産』の作成時期の詳しい情報が無いことがわかる。

当書では前頭格の産物を産地ごとに、蔵王山を中心とする奥羽山脈系の山々を東山系、出羽丘陵の山々を中心とする西山系、そして中央盆地を中心とする中央平地系の3区分に分けた分析を行っている。なおこれは名産のすべてではない。ここに載っているものがいかなる基準で選ばれたかは不明である。産物が多いのは順に中央平地系、東山系、西山系で、このような分類になった理由として、東山系は奥羽山脈には高山が多く、しかも深いため、中央平地系は上山盆地といわれる中央平野部が、東西山系部より諸産物の多いのは「当然」なため、出羽丘陵に属する西山一帯は山も低く、浅いためとしている。また東山系、西山系は自然物が多いの

に対し、中央平地系は自然物に人の手を加えた加工物が多く見られるのが特徴として挙げられ、上山で営まれていた暮らしの一部を垣間見ることができる。

当書は上山郷土史研究会『上山名産名所番付』にはない各名産の分類という視点が取り入れられている。しかし、当番付の出自や各名産の年代に迫る追究はやはり行われておらず、『上山名産』の明確な位置づけもなされていなかった。

以上を整理すると、上山郷土史研究会の分析や、『上市市史』の分析は双方とも各名産の詳細に注目しているものの、資料の性格に焦点を当てた考察はなされていない。また、なにより時系列が天保期とはいえない産物もあり、『上山名産』自体天保期のものであると断言できる証拠はないということがわかった。

3-3『上山見聞随筆』

次に、上市市史編集資料の菅沼定昭『上山見聞随筆』(菅沼1861~1896)の分析を行った。当資料は、上山に在住していた町人学者・菅沼定昭が文久元(1861)年~明治29(1896)年の35年間の間に見聞きした、上山に関する物事を書き留めたものである。昭和32(1957)年4月に上市市文化財に指定もされているこの書は、当書監修の柏倉亮吉氏によると、単に聴き取りという域には留まらず、史料収集の手堅さを重ねたもので、『上山見聞随筆』の歴史的記述が確かであることを裏付ける、数々の村方文書の内容も認められているという。このことから上山郷土史研究会『上山名産名所番付』、『上市市史』にも参考に用いられており、数少ない上市市の歴史史料のひとつとして数々の研究に役立てられている。本研究では、当書中「諸産業産物名物等」の項目を参考に、『上山名産』に記載があるものと、記載はないが当書で「名物」と明言されているものを分析した。

その結果、「諸産業産物名物等」の項には、上山の名物を指すものが複数確認され、番付の内容と一致するものもあった。しかし中には、「上山の名物」と明言されているにも関わらず番付には記載がないもの、つまり判断によっては名産として番付に載りえたと考えられる産物も散見された。一方、番付中で格が高いもののほとんどは幕府への献上品であったなど、一部格付けの基準が明確なものもあった。しかし当書は菅沼定昭が文久元(1861)年~明治29(1896)年の上山について著したものであるため、『上山見聞随筆』もまた、『上山名産』が「天保の資料」だという裏付けとは言い難く、

諸名産の詳細を深掘る参考資料として用いるに留まる。

3-4『旧藩政及上山町在名所古跡』

最後に、奈良崎安次郎『旧藩政及上山町在名所古跡』(奈良崎1914)の分析を行った。これは、後述の聞き書き調査でお話をうかがったO氏より、複製をご提供いただいたもので、『上山名産』作成の際に参考に用いられた可能性が高いという。

内容を確認したところ、当史料には『上山名産』の名産54項目中31項目の記載があり、『上山名産』の左側にある脇書き同様、「天保年度の調」の文字が見られた。なお31項目には格付けは行われておらず、先述同様、名産と明言しているものの、番付には格付けされていない産物もあった。

また『上山名産』で関脇に格付けられている高松和紙の記述もみられるが、他の産物の記述には無い、名産となるに至った経緯が添えられていた。

『旧藩政及上山町在名所古跡』より

是は上の山町松本長兵衛の先祖大和國吉野より下られし時持来里志処の尊像にして當家に祭りありしを故ありて高松村に安置し奉る者なりと云へ傳ふ正観音にして行基菩薩の御作此観音の因縁によりて高松村に於いて大和國吉野より外になき所の吉野紙やはら安さふと云ふ紙をお産出して名産とわなりぬ

『上山見聞随筆』、「高松観音と吉野紙」より

高松観音は松本長兵衛の先祖大和國吉野より下られし時に持来る處の尊像にして當家に祭りありしを後ち高松村に安置し奉るものなりといへ傳ふ正観音にして行基菩薩の御作此観音の因縁によりて高松村に於て大和の吉野より外に無き所の吉野紙やはらあざふといふ紙を産出して所の名産となれり

所々異なる部分はあるものの、『上山見聞随筆』からの引用といっても過言ではない。

また、前掲の上山郷土史研究会『上山名産名所番付』において、「長清水 瓜西瓜」が「明治4年以降に作られるようになった作物」とであると分析していたが、当史料を確認すると、長清水の大奉紙と共に「瓜」の名が見られる。この「瓜西瓜」と「瓜」は同一の作物をさすのか、詳しく調査を行った。

上山郷土史研究会『上山名産名所番付』の「長清水 瓜西瓜」の項では、瓜西瓜について「大きさは箱枕ぐらいの縞の

ある青い瓜」、「甘く美味、大きな瓜」とその特徴を説明しており、これは西瓜の特徴と合致する。頭に“瓜”とつけられていることから、瓜のように細長い形をした西瓜を指すと考えられる。そして、日本風俗史学会編『図説江戸時代食生活事典』によると、「明治時代以後にスイカが流行するまでマクワウリが日本の夏の果物の王座を占めてきた」と述べられている。これは瓜西瓜の「明治4年から41年まで栽培されていた」という説明と時期が重なる。

これらのことから、『旧藩政及上山町在名所古跡』の“長清水 瓜”、そして『上山名産』の“長清水 瓜西瓜”は別の物を指していることがわかり、作成者の誤認識が明らかである。それとともに作成者目線による、真実とは異なる判断が、史料の内容に影響を及ぼすということが再確認された。

以上をまとめると『旧藩政及上山町在名所古跡』の分析から、『上山名産』の名産54項目中31項目は『旧藩政及上山町在名所古跡』の「天保年度の調」より引用されていることがわかった。そして当史料自体も、『上山見聞随筆』からの引用があると考えられる。また長清水の瓜、瓜西瓜に関しては、作成者が『旧藩政及上山町在名所古跡』を番付作成の参考にいる際、“瓜”を明治4年～明治41年頃まで栽培されていた“瓜西瓜”という別物と誤認したものと思われる。またこのことから、見立番付には作成者の目線が大いに影響するということが改めて示された。

4. 聞き書き調査

聞き書き調査では、宮脇正八幡神社の宮司・禰宜を務めるY・H氏、Y・N氏、『上山名産』作成者・中島長右ヱ門のご子孫であるN氏、そして上山郷土史研究会元副会長のO氏に番付作成の経緯について尋ねた。Y・N氏は、

「天保は閉鎖的だった時代を経て人々が出歩くことができるようになり、旅行や伊勢参りなどが盛んになった時代。その流行に乗じて上山でもこのような番付を作ったのではないか。」

と仰っていた。また、Y・H氏とN氏は、

「天保期のものを昭和期に一から調べて作るのは困難ではないか。天保年間に作られた番付が存在し、それを昭和15年にそのままの内容で作直したのでは。」

とお考えだった。またN氏は

「この番付は私が生まれる一か月前に祖父たちによって作

られたものだが、親も興味を持っておらず、話を聞くことはなかった。」

と仰っており、番付作成の経緯に関し、先行研究のみならずご子孫でさえも詳しいことがわからない状態であるということが確認された。

続いてO氏に番付作成の経緯をうかがうと、

「もともと天保年間に作成された番付が存在し、それを基に大正3年『旧藩政及上山町在名所古跡』が作成され、今度はこれを参考にして昭和15年に『上山名産名所番付』が作られたのではないか。」

とお考えだった。また、当番付が作られた理由についても考えを仰いだところ、

「販売していたわけではないと思う。想像でしかないが、記念に配っていたのでは。」

とのことだった。

聞き書き調査により、作成された経緯は統一されておらず曖昧で、様々な予想があることが確認された。そしてご子孫にも詳しいことはわからない、つまり『上山名産』作成の経緯について、迫ることができるのは近似値まで、という事実が浮き彫りとなった。

5. 結論

上山郷土史研究会『上山名産名所番付』、『上市市史』などの先行研究では、『上山名産』に関して、各名産の詳細に焦点をあてた研究しか行われてこなかった。さらにその各名産の詳細について、天保期に相当すると言い切れる根拠は見つからず、むしろ天保期の生産とは考えられない産物が見受けられた。また聞き書き調査の結果によると、作成過程も不明瞭で、定まった位置づけがされていないことが再確認された。

上山郷土史研究会『上山名産名所番付』、『上市市史』内で、『上山名産』を読み解く鍵として用いられている『上山見聞随筆』は、菅沼定昭氏が文久元(1861)年から明治29(1896)年までの35年間に書き溜めたもので、天保期後の記録にあたるために、こちらも当番付が天保年間の内容であるという裏付けにはならない。また、当書には番付に見られる名産とともに、番付に載りえたであろう、“上山の名物”として明言されている産物も複数確認される。このことから、やはり作成者による名産の判別があったことが窺われた。

また大正3年の、奈良崎安次郎『旧藩政及上山町在名所古

跡』には、『上山名産』で格付けられている名産54項目中31項目の記載があり、当番付の脇書き同様、「天保年度の調」と記されていたことから、『上山名産』の作成に際し、『旧藩政及上山町在名所古跡』が基になっていると考えるのが妥当である。

そして、上山郷土史研究会『上山名産名所番付』の分析で、「長清水 瓜西瓜」の栽培が始まったのは「明治4年の廃藩置県後、従来の諸課税が無くなり、少しでも収入を得るため」との説明がなされているため、天保期の名産とは考え難いと思っていたものの、その後大正3年作成『旧藩政及上山町在名所古跡』の分析にて、長清水の大奉紙と共に“瓜”の記述が認められた。当初の予想がはずれたかに思われたが、その後の調査で“天保時代の名産・瓜”と、“明治4年から41年頃まで栽培されていた瓜西瓜”の誤認が見受けられ、やはり瓜西瓜は天保期の上山の名産とは言い難く、これによって『上山名産』を天保期の資料であると位置づけることは不可能になった。さらに「手職の将棋の駒」や「須田坂熊野山の松」の事例もこの事実を裏付ける。これら3つの事例からは、作成者目線による、真実とは異なる認識・判断が、資料の内容に影響を及ぼすということが再確認された。

また上山郷土史研究会『上山名産名所番付』で、『旧藩政及上山町在名所古跡』の作成者・奈良崎安次郎と『上山名産』作成者の中島弥兵衛氏には面識があった旨が説明されていることも踏まえ、『上山名産』は、大正3年作成の史料、『旧藩政及上山町在名所古跡』から、31項目の名産を昭和15年に選出し、さらに石黒氏・中島氏による判断のもと残り23項目が加えられて格付けされたのち、作成された番付であると結論づける。

また瓜西瓜誤認の件や手職の将棋の駒、須田坂熊野山の松の事例を考えると、番付に格付けられた産物が、すべて天保期のものかというとその信憑性は低く、当番付は「天保期の資料」という性格を持しているとは言い難い。「昭和の目

線による天保期の上山の名産(名所)一覧」という位置づけが最適であろう。むしろ天保に限定せず、あくまで上山の古産物を知るために活用すべきである。

また、本研究はテーマである名産・名所のうち名産のみに注目している。名所部分の研究次第ではまた異なる結果となる可能性も充分に考えられるため、当資料の更なる追究を今後の課題としたい。

《主な参考・引用文献》

- ・[愛知県教育委員会『愛知県史研究18』(愛知県 2014)]
- ・青木美智男『決定版番付集成』(2009 柏書房)
- ・青木美智男『《講演抄録》愛知県陶磁資料館特別企画展 茶人のあそび心 形物香合番付の世界記念講演会「見立番付研究からみた形物香合番付」』
- ・[青木美智男・林英夫編『番付で読む江戸時代』(2003 柏書房)]
- ・石川英輔『大江戸番付づくし』(2001実業之日本社)。
- ・上山郷土史研究会『上山名産名所番付』(上山郷土史研究会 2001)
- ・上山市編さん委員会『上山見聞随筆 上』(上山市 1976)
- ・上山市編さん委員会『上山見聞随筆 下』(上山市 1977)。
- ・上山市史編さん委員会『上山市史 別巻下 民俗資料編』(上山市 1975)
- ・上山市編集資料『藤井御傳記』(上山市 1974)
- ・村木真理『見立番付から読み解く日本近世社会』[機関誌『歴史地理教育』2023年3月号(2023 歴史教育者協議会)]
- ・奈良崎安次郎『旧藩政及上山町在名所古跡』(大正3(1914)年2月1日)O氏より複製を提供。
- ・山形新聞(昭和56年12月24日、昭和57年2月4日)
- ・日本風俗史学会編『図説江戸時代食生活事典』(雄山閣出版 1996)
- ・上山市役所ホームページ/上山市の紹介/上山市プロフィール/上山市の地勢
<https://www.city.kaminoyama.yamagata.jp/soshiki/2/km201300775.html>(2023年12月7日最終閲覧)
- ・上山ラブソディ
<https://kaminoyama-spa.com/>(2023年12月7日最終閲覧)
- ・天童市史編さん委員会『天童織田藩史』(天童市 1987)139,144頁および山形県天童市/著名人/吉田大八
<https://www.city.tendo.yamagata.jp/tourism/kanko/daihachi.html>(2023/12/9最終閲覧)

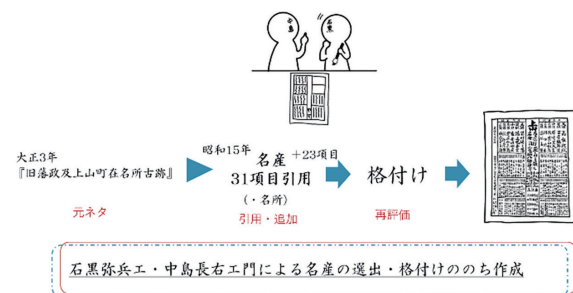


図4 上山名産名所番付作成の経緯再考